

主 題：すべては神の栄光のために

聖書箇所：コリント人への手紙第一 10章23節－11章1節

きょうは新約聖書コリント第一の手紙の10章23節からみことばを学んでまいります。

☆キリスト者が持つ「自由」と「責任」について

コリント教会がパウロに質問したことは偶像に捧げた肉を食べてもいいのかどうかということでした。パウロはその質問に対する答えを8章から記していますが、きょう我々が見るところはその最後です。パウロが何を教えたかったのか——。一言で言うなら、我々クリスチャンに与えられている自由と、それに伴う責任についてです。

A. キリスト者の自由と責任 23－24節

1. 「与えられた自由」 23節

23節を見ると、「すべてのことは、してもよいのです。しかし、すべてのことが有益とはかぎりません。すべてのことは、してもよいのです。しかし、すべてのことが徳を高めるとはかぎりません。」とあります。お気づきになったように「すべてのことは、してもよい」のだと繰り返しています。パウロがまず教えたかったのは、感謝なことに私たちイエス・キリストによって罪赦されたひとりひとは、すべてのことをしてもいいということです。この「してもよい」というのは「赦されている」とか「合法的である」ということです。そのことによって責められることがないということです。確かに私たちクリスチャンには自由が与えられている。かつてのイスラエルには大変な律法が存在しました。それを厳守しなければいけないということで、彼らは大変な戒律のもと歩んでいました。今我々はそういうものからも全く自由とされ、すべてのことはしていいと言うのです。

もちろん、では罪を犯してもいいのかというと、そうでないことは明らかです。ですから当然そこには例外が含まれます。しかしそれでいて、罪も含めて何をして構わないという考えを持ったクリスチャンたちがいることも事実です。私たちの過去も現在も未来もすべての罪は赦されたのだから、好きなように生きて構わないのではないかと。パウロもそういう人々が存在することを知っていたので、ローマ6：15で「私たちは、律法の下ではなく、恵みの下にあるのだから罪を犯そう、ということになるのでしょうか。」と言っています。まさに今お話ししている罪赦されたのだったら何をして構わないではないか、何をしても神は赦してくれたし、赦し続けてくれるといった考えを持った人々に対して「絶対にそんなことはありません。」と言っています。もし、あなたの周りにこういうクリスチャンがいるとすれば、あなたはちゃんと教えてあげないといけない。その人の問題は、救いというのがよくわかっていないということです。救いが罪から解放される罪の赦しをいただくことだとしたら、イエス様を信じたら、救いは完了したわけです。なぜなら罪の赦しが必要であるのはもちろんそうですが、罪の赦しをいただいた、それで救いは達成された。しかし、みことばを見る時に、罪の赦しをいただくというのは救いの終わりではなく始まりです。ですから救いの定義を求めるならば、ある人々は罪の赦しをいただくことだ、永遠のいのちをいただくことだと言うかもしれない。でも聖書を見るならば、救いというのは新しく生まれ変わることで。

イエス様がニコデモに対して、「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」(ヨハネ3：3)と言われました。皆さんもみことばをご覧になってお気づきになると思いますが、みことばの中で繰り返し「善を行ないなさい」といった命令が記されています。例えばⅠテサロニケ5：15には「だれも悪をもって悪に報いないように気をつけ、お互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行なうよう務めなさい。」、またⅡテサロニケ3：13には「しかしあなたがたは、たゆむことなく善を行ないなさい。」とあります。少し考えていただきたいのですが、まだイエス・キリストの救いを受け入れていない人に、例えばこの「善を行ないなさい」という命令を与えたとします。その命令を聞いたからと言って、その命令を実践することは可能なのでしょうか？救いをいただいていない人が、善を行う生き方を始めることは可能なのでしょうか？皆さんご存じのように、答えは不可能です。パウロはローマ3：10で「義人はいない。ひとりもない。」と言いました。同じローマ3：12bで「善を行なう人はいない。ひとりもない。」と言います。つまり私たちは、罪の赦しをいただかなければ神の前に善を行うことは絶対にできないのです。ということは、救いにあずかったゆえに、我々はかつてできなかったことを行うことができる者となったのです。私たちは新しく生まれ変わったのです。だから善を行えという命令が与えられているのです。新しく生まれ変わったあなたや私にとってそれが可能だからです。

パウロは私たちには自由があると言いました。神様に喜ばれることもできるし、神が悲しませることもできるという自由です。よく人々はこれを自由意思と言います。でも自由意思をいただいたのは私た

ちクリスチャンであって、救いにあずかる前、人々のうちに自由意思はありません。なぜなら今見てきたように、救いにあずかっていない人々は神に喜ばれることをしようとは思わないし、そのようなことを実践することもできない。できることは神に逆らい続けることだけです。「善を行なう人はいない。ひとりもいない」のです。「義人はいない」のです。神の前に喜ばれる歩みをなすことのできる罪人は一人もいないのです。ですから救いにあずかる前は、私たちに自由意思がなかった。罪を犯すことしかできなかったのです。でも罪の赦しをいただいて救いにあずかったゆえに私たちには選択ができたのです。自由意思をいただいたのです。神に喜ばれる歩みもできるし、神に逆らうこれまでの生き方を継続することもできるのです。

まずパウロが教えているのは、我々イエス・キリストの救いにあずかった者たちには自由が与えられているのだということです。だからあなたが偶像に捧げられた肉を食べていいのかどうかというと、自由が与えられているがゆえに食べて構わないと言うのです。

2. 「与えられた責任」 23-24節

それを教えた上で、でも同時にあなたには責任があるとパウロは言います。23節「すべてのことは、してもよい」と言うのです。「しかし、すべてのことが有益とはかぎりません。すべてのことは、してもよいのです。しかし、すべてのことが徳を高めるとはかぎりません。」と。

1) 「有益」

まず、「有益」ということばが出ています。これは「何かを助けること」、「利益を与える」とか「役に立つ」ということです。

2) 「徳を高める」 ローマ14:19

また「徳を高める」というのは、例えば「家を建てる」という意味のあることばで、「何かを建てる」とか「その人の信仰を強める」ということです。家を建てていくようにその人の信仰を建て上げていく、その人の信仰が成長していくと。この「徳を高める」ということばは動詞で、このことばに由来した皆さんがよくご存じのことばがあります。それは「霊的成長」ということばです。ローマ14:19に「私たちは、平和に役立つことと、お互いの霊的成長に役立つこととを追い求めましょう。」と出てきます。これは先ほど見た「徳を高める」ということばの名詞形です。

ですから、言わんとしているメッセージははっきりしています。我々は罪以外はどんなことをしても構わない。しかし、あなたはその自由を用いて、兄弟姉妹たちの信仰の成長、霊的成長に役立つことを選択しなさい、それがあなたの責任だと言うのです。あなたの周りの兄弟姉妹たちの霊的成長を目指してあなたが行動することがあなたの目的なのだ。24節「だれでも、自分の利益を求めないで、他人の利益を心がけなさい。」とあります。この「求め」とか「心がけ」という動詞はどちらも現在形の命令です。継続してそれを行いなさいと。つまりパウロが言いたかったのは、あなた自身の利益よりも周りの人々の利益を優先するよにということです。確かにあなたも私も神の前に霊的に成長する責任があります。神様の救いにあずかった私たちは日々の生活において成長するという責任があります。その責任を軽視しているのではない。その責任は存在するのですが、同時に、あなたの成長よりもあなたの周りにいる兄弟姉妹たちの霊的成長に関心を払いながら生きていきなさいとパウロは教えます。そんな教会となったら、神様はどんなことをなしてくださると思います？教会員がともに集まった時に、周りの兄弟姉妹たちの霊的成長を願い、そのために一生懸命労していると。そのために喜んで犠牲を払っていると。

私たち人間の一番大きな問題は、すべての物事を中心に自分を置いていることです。自分が思い通りに扱われなければとか、自分が期待するように人々から関心を集めることができなければとか、関心を払われなければ、私を一体だれだと思っているのと私たちは不満に思うのです。そこに一番問題があるのです。この世の中で一番好きなのは自分だし、その一番愛する自分が傷つけられることは許せない。でも救いにあずかり、新しく生まれ変わったら私たちの生き方は全く変わるのです。私よりも神を愛する者になる。私よりも隣人を愛する者になるのです。私たちが覚えなければいけないのは、私たちの歩みの一番大きな問題は、自分を一番大切に、自分を一番愛していることです。私の願いどおりでなければいけない。私の思いどおりでなければいけないと。信仰生活においてそれが一番問題でしょう？自分のやりたいことと主のみこころ、いつもこの闘いの中にあるのです。どんなに私たちは主のみこころに従うとか従うことが一番の祝福だ、そこにこそ本当の喜びがあると聞いても我々は自分の思いどおりに生きていきたい。そしてその思いどおりに生きることがみこころであると願い続けるのです。私たちはどれだけ自分を中心に生きているのか、そのことはあなたも十分ご存じだと思います。

このみことばを見た時に、喜んで周りの兄弟姉妹のために犠牲を払いなさい、彼らの成長のために労しなさい、自分に向けられている目をあなたの周りの人に向けなさいとパウロは教えます。もしあなたがそういう働き人になれば、確実にあなたは周りの人々に祝福をもたらす人になります。なぜかという

と、神があなたを喜び、あなたを通して神ご自身が働くからです。感謝なことに私たちの群れにはそういう兄弟姉妹たちがおられる。そういう人たちは常に祝福を与えてくれます。パウロが教えるのは、あなた自身がそういう人になりなさいと。あなたはそのいただいている自由をしっかりと用いて、周りの兄弟姉妹たちの成長に役立つことを行っていきなさいと。

B. キリスト者の自由と責任の実践 25-11:1

自由と責任について、パウロが教えた後、25節からそれを実際に生活で生かしていくための実践編に入っていきます。パウロは非常に具体的な例を挙げながら、こういうケースに直面した時に私たちはどうしたらいいのかを教えてください。

1. 市場で売っている肉について 25-26節

まず25節を見てください。「市場に売っている肉は、良心の問題として調べ上げることはしないで、どれでも食べなさい。」とあります。まず最初にパウロは市場で売っている肉について説明します。彼の答えはこうです。あなたが市場に行ってそこで肉が売られている時、躊躇しないでそれを買って食べなさいと。彼は「市場に売っている肉は、良心の問題として調べ上げることはしないで」と言います。この「調べ上げる」というのは、「調査する」とか「研究する」という意味です。これは「繰り返し」ということばと「見分ける」ということばが一つになったことばです。彼が言いたいことは「良心の問題として調べ上げる」、つまりあなた自身の良心のために調査をしないということです。どういうことかというと、肉を買おうとする時にこの肉が一体どこから来たものなのか、私たちはそういうことを知りたいと思うかもしれない。どこの農場から来たのか、だれの手によってさばかれたのか、ひよっとしたらこれは偶像に捧げられているのではないかと。そういった詮索をするのをやめなさいと言っているのです。そんなことを調査する必要はない、そこで買ったならそれを食べたらいいのだと言うのです。確かに心の中で良心が「でも、これっていいんだろうか」と言うかもしれない。でも詮索しないで食べたらいいと。

・その理由 26節

その後理由が記されています。26節「地とそれに満ちているものは、主のものだからです。」とあります。地に満ちているもの、つまりこの地上のすべてのものです。偶像に捧げた肉だったとしても、それは偶像の所有物ではないのです。なぜなら偶像自体が存在しないからです。パウロは、この地上のすべてのものは「主のもの」だと言うのです。なぜなら主がその家畜をお造りになったからです。悪霊たちが造ったのではないのです。ですからそのすべてのものが「主のもの」である以上、あなたたちはそういうことを詮索しないで、主に感謝していただければいいのだと教えます。

あえてここで「地」に限定しているのは、今話しているのが食べ物の話だからです。主は「地」だけを支配しているのではない、この宇宙もすべてのものを支配し、所有しておられる。すべては「主のもの」です。でもあえて今肉の話をしているので、パウロはこう教えます。だから市場で売られている肉は詮索しないで食べればいい、それが一つ目のパウロ自身が与える答えです。

2. クリスマン出ない人の家に招かれた時について 27節

二つ目に27節を見てください。「もし、あなたがたが信仰のない者に招待されて、」と、二つ目のケースは、まだイエス様の救いを受け入れていない人があなたを自分の家に食事に招待してくれた場合どうしたらいいのかということをお教えます。「行きたいと思うときは」と書いてあります。だから招待されてもし行きたいと思ったら行きなさいと言っているのです。そして、その後「良心の問題として調べ上げることはしないで、自分の前に置かれる物はどれでも食べなさい。」と。「良心の問題として調べ上げることはしないで」と同じフレーズが25節にもこの27節にも出ていました。言っていることは同じです。誰かの家に招待されて食事が出てきた。この肉はどこから出てきたのですか？これは偶像に捧げたものですか？、そんなことを詮索しなくていいと。出されたものは喜んで感謝していただきなさいというのがパウロの教えです。

3. 信仰的に弱いクリスマンがいた場合について 28節

その上で、28節を見ると「しかし、」という接続詞がついています。例外が存在するということです。今私たちが見てきたのは市場に行って肉を買ったら食べたらいいと。まだイエス様のことを信じていない家に招かれてあなたがそこに出かけて行って、そこで肉が出てきたら食べたらいいと。ただし、このことに気をつけなさいと。28節「しかし、もしだれかが、『これは偶像にささげた肉です。』とあなたがたに言うなら、」と出てきています。まずこの「だれかが」というのは恐らくその場に居合わせたクリスマンのことです。文脈を見ると明らかにこの偶像に捧げた肉を食べていいのかを思案しているのはクリスマンだからです。それ以外の人たちはそんなことを気にもしていない。ですからそこにクリスマンがいて、そのクリスマンが「これは偶像にささげた肉です」とあなた方に言うなら、そう知らせた人のために、また良心のために食べてはいけないとパウロは言うのです。「これは偶像にささげた肉」であって、それを食べてはいけないと思っている人がそこにいて、あなたにそのことを言うのであれ

ば、その人のためにあなたは食べてはいけなと。この食べてはいけなというのも現在形の命令です。してはいけなとパウロは教えます。

・その理由 28-29節

その理由はその後に書いてあります。28節「そう知らせた人のために、また良心のために、」食べてはいけなと。そのことをあなたに告げた人のために、また「良心のために」と。パウロが教えたいことは、この人がもしそのことをあなたに告げたとしたら、この人が一体どういうことにとまどっているのか、どんなことに疑問を抱いているのかがわかるだろうと。なぜならパウロが教えたように、信仰的に成長した人はどんな肉であったとしても所有者は神であり、その肉は汚れているわけではないし、私たちは神が下さったものとして感謝をもっていただければいいと知っています。でもそう思っていない人、まだそのように自分自身の良心を納得させていない人がいるのです。この当時、サタンや悪霊が人のからだに入ろうとねらっているのだと信じている人々がいたのです。彼らがどういう方法で人間のからだに入るのかというと、食べ物を通して入ると。ですから偶像に捧げた肉を食べたら、悪霊やサタンが自分のうちに入ってしまふのではないかと恐れたのです。その人たちにすれば、偶像に捧げた肉を食べたら大変なことになると考えるのは納得できますよね。だから彼らは正しく聖書からそのことについて神は何と教えてくださっているのかを知ることが必要なのです。偶像に捧げた肉だとあなたに告げた人はまだ心の中で、これは食べていいことだと本当に納得し切っていないのです。これはまずいのではないかと思っています。だからパウロは、29節にあるように、「私が良心と言うのは、あなたの良心ではなく、ほかの人の良心」、つまりあなたにそのように告げているその人のために、その人の良心のために食べてはいけなと教えたのです。

4. パウロの歩みの証し 30-11:1

29節の後半のところから、パウロは主語を変えています。ここからパウロは自分自身の例を引き合に出して、この大切なメッセージをコリントの人々に教えようとしています。

1) 神に喜ばれることを願いながら生きた 30節 詩篇92:1

どんなことを教えようとしたのか、29-30節を見てください。「私の自由が、他の人の良心によってさばかれるわけがあるでしょうか。もし、私が神に感謝をささげて食べるなら、私が感謝する物のために、そしられるわけがあるでしょうか。」、非常によく似たことをパウロはこの2節にわたって言っています。

「私の自由が」、つまり私は自分の自由を用いて神の前に正しいことを実践する。でも結果として周りの信仰者たちが、周りの人々があなたをさばくことになってしまう。この「さばく」というのは「非難する」とか「咎める」ということです。そういうことがあってはいけなということ。同じように30節でもパウロは「私が神に感謝をささげて食べるなら、私が感謝する物のために、そしられるわけがあるでしょうか。」、この「そしられる」というのは「ことばでののしられたり」、「悪口雑言を言われたりする」ということです。パウロが感謝をしていた物に対して、周りの人がパウロのその行為を責めたり、その行為に対して悪口を言う、そういうことがあってはならないと言っているのです。

パウロはここでそれを教えたのです。どういう意味か説明していきます。この29節も30節も同じことを言っています。私たちは自分の自由を用いて、神の前に正しいことをしようとするのです。生まれ変わったあなたは神様が喜ばれることをしていきたいという願いを持っておられるでしょうか？パウロは30節で「私が神に感謝をささげて」と言いました。神の前に感謝を捧げるということは正しいことです。もっと言えば、神はそれをお喜びになります。あなたがいろいろなことに対して神様に感謝する。それを神様はお喜びになる。だから私たちが感謝を捧げる時に心から捧げているのか、ことばだけで捧げているのか、そのことをよく考えなければいけなです。なぜなら心の伴っていない感謝を神様はお聞きになっても喜ばれるはずがないのです。詩篇の著者が詩篇92:1で「主に感謝するのは、良いこと」と言うように、神様に感謝することはよいことなのです。この恵みを感謝します、あなたのこのあわれみを感謝します、この食事を感謝します、こうして守られたことを感謝しますと神様に感謝することはすばらしいことです。神がお喜びになるのです。あなたや私が神様に感謝する時というのは、間違いなくあなたも私も神の前に正しく歩もうとしている時だと思いませんか？神様に喜ばれることをしたい、そう思っている時に神が喜ばれることを私たちはしたいと思うし、実際に実践するのです。神様が喜ばれることをしたくないと思っている時は、私たちは神の前に正しく歩んでいないことがあります。私たちは主の前に正しく歩んでいるのだったら、神が喜ばれることをしたいのです。神様に感謝をしたいのです。

だからパウロは言うのです。あなたがそのように行動していながら、なぜあなたの周りの人たちがあなたを非難したり、口汚くののしったりするようなことが起こるのですかと。この二つは全く矛盾していると思いませんか。神に喜ばれることをしたら、周りの人々が、例えば信仰的に弱いクリスチャンがあなたの悪口を言います？パウロが教えたいのは、この二つは相容れなということ。例えば兄

弟にそしられること、兄弟に非難されることをあなたは神に感謝して行うことができるか、神に感謝しながら、神が悲しまれることをどうして行えるのか、矛盾していると思わないかと。

私たちが神に喜ばれたいと思って、神がお喜びになることを選択しようとする。それは罪ではありません。神様のみことばに沿ったことを私たちは選択しようとする。その時に神は喜んでくださる。そうやって私たちは自分の自由を使って、神が喜ばれることをしっかり見極めて、それを選択して生きていこうとするのです。その時に注意しなければいけないことがある。それは信仰的に弱いクリスチャンたちがそれによってつまずいてしまう。彼らがあなたの行動だけをまねても、彼らの心の中ではまだじっくり行っていないのです。まだ罪悪感が残っているのです。彼らがそんなことを行うきっかけにあなたがなっただけとはいけないのだと。確かに私たちには自由な選択があるのです。でも事によっては、信仰的に弱い人たちのつまずきになるようなこともあるかもしれない。それを注意しなさいと。

ここで多分一番わかりやすい例は、例えばアルコールに関することかもしれない。アルコールを飲む人というのは責任があります。それが神の前に喜ばれると確信してすべきなのです。みことばを見て、そして私はこの行為によって神の栄光を現すことができると思って、それを選択する。ただしそれをそう思っていないクリスチャンたちの前で実践するならば、その人たちにとって大変なつまずきになるかもしれない。配慮しなさいということです。パウロが言いたかったことは自由があるけれども、実はそこには責任が存在するのだということです。あなたは神に喜ばれることをしているでしょう？でもその喜ばれることが人々のあなたへの批判となってしまうのなら、人々があなたに対して悪口を言っているのなら、あなたはもう一度考えなければいけないと教えたのです。

2) 神の栄光のために生きた 31節

そこで31節、「こういうわけで、」ということばで始まっています。これは接続詞で「それゆえに」とか「その理由で」ということです。「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。」と。「食べる」、「飲む」という私たちが日々行うそういう行為からそれ以外のすべてのことにおいて、パウロは「ただ神の栄光を現わすためにしなさい」と言うのです。それこそがキリスト者の生き方なのだと、それこそがキリスト者の人生そのものなのだと。あなたのなすことのすべてを主が喜んでくださる、あなたのなすことすべてをご存じである神様が喜んでくださる。だとしたらこれ以上の喜びはないと思いませんか？確かに私たちの日々の生活において、嫌なこともたくさんあります。腹立たしいこともある。悲しいこともある。辛いこともある。いろいろなところで理不尽な扱いを受けるかもしれない。あなたがそのようなことに直面した時に、あなたはみずからに問いかねなければいけません。あなたの心をご覧になっておられる主は、あなたの心を見てお喜びになっておられるかどうかです。我々はいろいろな口実を並べるかもしれませんが。こんなことを言われたからとか、あんな人がいるからとか、こんなことになったからとか。でも神様はそのすべてのことをコントロールされているのです。そしてあなたにそのような機会をあえて下さった。あなたの横にあなたにとって最も付き合いにくい人を置いてくださった。あなたにとって最も愛することの難しい人を置いてくださった。偶然そんなことは起こらないのです。神様はあなたの信仰を試そうとしているのではないのです。神はあなたの信仰がどれほどのものかをあなたに気づかせようとするのです。

我々は自分が思っているよりも信仰的にもすべての点においても劣った存在です。私たちの中で、神の前で本当にすべてにおいて喜ばれる歩みをしていると思っている人なんています？私の歩みは神の前に喜ばれていますと。正直言えば、あなたが思っているよりもあなたはもっとももっとももっとも罪深いのです。つまり我々は自分のことをわかっていないのです。自分は結構いい信仰者だと思っているのです。だから神様は私たちに本当の姿を示してくださるのです。いろいろな問題を抱えた時に、私たちはどんなふうにもその問題と向き合うのかです。どんなふうにも神を見上げるのかです。どんなふうにもその問題の中で正しく物事を対処していくのかです。もっと言えば、その問題の中でどのように神の栄光を現すのかです。あなたには自由が与えられていて選択できるのです。この状況のいろいろな選択肢の中で神を喜ばせるに一番ふさわしいものは一体何かと。みことばに沿って、神様のすばらしさを現すために必要なのは何か——。それをしっかりと選択しなさいと言っているのです。当然それは難しいです。でもみことばを見る時に、そして私たちが神に助けを求める時に、神は助けてくださる。だから私たちの信仰生活というのは、この大変な環境にあって、このような悩みにあふれる状況の中にあって、神様、あなたが喜ばれることをしていきたい、教えてください、そして教えるだけではなくてそれを行えるように助けてくださいと。

パウロが「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。」と教えました。そしてパウロはこのように生きていたのです。コリントの人々は1年半パウロと生活をともにしたのです。彼がどんなふうにも生きていたのか、そのことを彼らは知っています。後にパウロは殉教していきます。いろいろな迫害を経験したのです。なぜ？と思うことは山ほどあ

ったのです。でもその中で彼はここで言ったように、神の栄光を現すために生きたのです。ですから皆さんが、私が覚えなければいけないのはいろいろなことを日々経験する中であって、あなたや私の責任はあなたの自由を用いて神が喜ばれることは何か、神の前に一番すばらしいこと、神のみこころは何かということをしかりと見極めてそれを選択して生きていくことだと。そしてもしあなたがそのようにすべてのことを神の栄光のためにするなら、何が起こるのか——。その後の箇所パウロは教えています。

3) 人々の益のために生きた 32-33節

32節「ユダヤ人にも、ギリシヤ人にも、神の教会にも、つまずきを与えないようにしなさい。」とあります。「ユダヤ人にも、ギリシヤ人にも」というのはすべての人を指しています。そして「神の教会にも」というのは間違いなく救いにあずかっている者たちです。ですから救いにあずかっようとそうでなかりと、すべての人々にという話です。もしあなたが、あなたのすべてのことを神様の栄光を現すために行っていこうと決心して、神の助けをもらいながら歩んでいるのだったら、あなたはこういう人々の前で「つまずき」を与えることがなくなるのです。ここで「つまずき」と書かれているのですが、ここで使われているギリシヤ語のことばは新約聖書の中に3回しか出ていません。そのことばは「人々の反感を引き起こすことがない」とか「非難すべきところがない」、「人々が不快を感じない」、「気を悪くしない」という意味を持ったことばです。ですからほかの二カ所、使徒24：16では「責められることのない」と訳しています。ピリピ1：10では「非難されるところがない」と。もしあなたが神の栄光のために歩んでいるのだったら、あなたの歩みは少なくとも人々があなたを見てあなたを責めたりあなたを非難するところがないと。そしてパウロはそんなふう生きていたのです。

33節「私も、人々が救われるために、自分の利益を求めず、多くの人の利益を求め、どんなことでも、みんなの人を喜ばせているのですから。」とあります。この33節は原語から直訳すると、少し日本語と意味が変わってきます。「同じようにすべてのことにおいて、すべての人々を喜ばせようとしています。私自身ではなく、多くの人々の利益を私は求め続けています。それは彼らが救われるためです。」となります。パウロはすべてのことにおいて、すべての人々に対して、彼らが喜ぶようにと考えて歩んだと言うのです。このすべての人を喜ばせるというのは、いつもパウロは人々の機嫌を取っていたのかというと、そういうことではありません。先ほど私たちは32節で「つまずき」ということばを見ました。「つまずき」というのは人々からいろいろな非難を受けたり、人々が反発を感じるのです。それとは全く逆で人々が喜ぶと。もし私たちが今見てきたように正しく自由を用いて正しい選択をしなければ人々はあなたに対していろいろな反感を覚えるでしょう。あなたを非難するでしょう。だからパウロはそうではなくて彼らが喜ぶように神様の前に正しく歩もうとしていた。神様の栄光のために生きていこうと。

今見てきたように、パウロが神の栄光を現したい、神様が喜ばれることをしていきたいと、そのように生きていくなれば、人々はその歩みに対して反感を覚えないと。もちろんそういう人もいます。なぜならイエス様が地上にいた時にみんながイエス様を歓迎したわけではありません。でも神を恐れて神の前を正しく歩もうとするならば、この人にはこんな罪があるとか、この人はこんな点で不誠実であるとか、そういった非難はない。ですから神の前に正しく歩むなら、神の栄光のためにすべてのことをしていくなれば、それはその人たちが喜ばれることであるとパウロは教えます。

・その目的 33節

そしてそのように生きる生き方の目的を最後に言ったのです。先ほどもお話ししたように、直訳した時に一番最後に出てきたのが人々が「救われるため」ということでした。原語の中にはこの人々が「救われるため」の前に目的を表す接続詞が置かれています。ですからパウロはこういうふう生きてきた目的は何かということ最後に明らかにしたのです。それは人々が救われるためだと。パウロは自分に与えられた自由を感謝しながら、その中で何が神の前に正しいのかを考えて、正しいことを選択しようとした。でも時には正しい選択であったとしても、人々のつまずきになるのだったら、彼らの成長の妨げになるのだったら、あえてそれを行おうとはしなかった。そうやってその人たちのことを心にとめて、彼らのことを思いながらパウロは歩んできた。だからパウロは私はすべてのことを神の栄光のためにしていると言ったのです。ただ神様が喜んでくださることだけを望んで私はやっている。あなたがそのように歩む時に何が起こるかということ、あなたの周りのクリスチャンたちの信仰は成長することです。なぜならあなたを見て、そしてあなたのうちに働かれる主を見るからです。そしてあなたの周りのクリスチャンでない人たちはどうかということ、あなたのうちに主を見るからその主にある者たちは惹かれていくのです。ある者たちは今までと同じように反発を継続すると。だから人の益のために生きたのです。

私たちも私たちの周りの愛する者たちがこの救いにあずかってほしいと願います。だとしたら何が必

要か、私たちはすべてのことを主の栄光のためにし続けていくのです。神がお喜びになることが一体何なのか、何がみことばに沿っているのか、何が神のみこころに沿っているのか、そのことをしっかり見極めてその歩みを継続することです。パウロが生きただけのように私たちは生きるのです。その時に私たちは希望が神から与えられるのです。もし神様のみこころに反すること、自分たちの思うことをしているのなら、私たちは神様の働きを期待することはできません。あなたがどんなによいと思うことを一生懸命したとしても、そこに神の働きがなければ、あなたの期待するものはそこに実現することはありません。例えば人の心を変えてほしいとか、あなたの愛する者たちが救われてほしいと願った時に、私たちがどんなに働いても、どんなに努力しても私たちは人の心を変えることはできない。神に働いていただかなければいけない。では神様に働いていただくために私たちに必要なことは、我々ひとりひとりが神の前を正しく歩むことです。神の栄光のために、この目的のためだけに生きることです。私の考えていること、私の口に行っていることや行っていること、私のすべてのことが神に喜ばれるかどうかです。そう言いながら、私たちが含めてすべてのことが喜ばれていないことを我々は知っています。だからそのことを神の前に告白しながら生きていくのです。でも少なくとも私たちの歩みにおいて心に決心したことは何か、主よ、私はこの残された人生をあなたの栄光のためだけに生きたい、そのために私を造り、そのために私を救ってくださったから。どうか主よ、助けてください、あなたが望まれるように生きていきたい、あなたの栄光が現される人生をしっかりと最後まで全うしていきたいと。その時に私たちは主のみわざを期待できるのです。

4) 主を模範にして生きた 11:1

最後 11:1 を見てください。「私がキリストを見なられているように、あなたがたも私を見ならってください。」とあります。直訳するとこうなります。「私の模倣者にあなた方はなりなさい。私もキリストの模倣者であるように。」これが 11:1 が教える意味です。パウロは今話してきたような生き方を勝手に思いついたのではないのです。彼はイエス様がそんなふうに進んでおられるのを見たのです。主イエス・キリストは父なる神の栄光のために生きたのです。だからイエス様は「あなたがわたしに行なわせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現わしました。」とヨハネ 17:4 で言われました。イエス様は地上にあって、父なる神様の栄光を現したのです。どんなふうに進んだかということ、主のみこころに忠実に従ったのです。パウロはそれを知った時に、主イエス・キリストが人として地上にあって神の栄光を現したように、私もそんなふうに進んでいきたいと。そしてその生き方を記してくれたのです。すべてのことを神の栄光のためにしなさい。あなたがいろいろな選択を日々の生活においてなしています。すべて神の栄光のためにしなさいと。神が喜んでくださることを考えて選択しなさいと。そうやって皆さん生きるのです。私たちが愛してこんなすばらしい救いを下さった神様、この方の栄光のために生きられるというのは私たちに与えられた特権です。この方のすばらしさをこの世に証ししながら生きるというのは我々クリスチャンに与えられた大きな特権です。

神様があなたを通して神様のすばらしさを世に証ししてくださる。そのためには神があなたのうちに働いていなければいけないのです。なぜなら私たちは神様の助けがなければ神の栄光を現すことができない。そして感謝なことに神はあなたのうちに働いてくださっているのです。今あえて現在形で言いました。なぜならあなたのうちには聖霊がいるからです。聖霊があなたのうちで働きをなしてくださっているのです。あなたがこの地上にいて、神の栄光を現す者として成長するように、あなたをイエス様に似た者に変えていく。だから私たちは自由を得た者としていつも考えなければいけない。主の前に正しいことは何なのか、神の栄光を現すことは一体何なのか。私たちはそれが我々の日々の祈りになるはず。主よ、あなたの栄光のために生きていきたいから教えてほしいと。感謝じゃないですか？主がこんなどうしようもなく罪深いあなたや私を使ってくくださるのです。そういう主によって用いられる人生を我々は生きることができるのです。そしてもっと言えば、その人生をあなたも私も歩み始めたのです。神の栄光を現す人生です。神のすばらしさを世に示す人生です。その歩みをするためには、まずそのことをあなたが願うことであり、罪から離れて主のみこころに従っていくことです。主よ、どうか私を使ってください。その祈りをもってあなたが歩み続けていくことです。主がどんなみわざをなしてくくださるのか期待しながら、主に従い続けてまいりましょう。